日本歲時記

卷之四

日本紀聞記巻之四

夏漫書稗官志云云夏ハ假なり假ハ大なり物假大なりと
いふ事なり朱明と云ハ赤帝火王と服せしいふ事なり
あとお而す暑熱乃義とかや

素問云云文三月これを蕃秀と云天地気交て萬物蕃秀す夜ハ臥しおくく起き庭前日志をして
ゆくるやうなるべし英華とハ華秀を成しめ天気をして泄をゆるやかにせしむ畢く出し畢く
逆しもと練るをいふ泄ハ洩に同じ洩ハ漏ふ洩ハ漏ふんと傷ふてをいふ
若かし

千人金方云く元文の
人をして面皮あつく癖を
又曰文七年二月昔さ味
脾臓を害ふ
内経にいへく文月冷石鉄抱なと枕とし漆と
なれたに人の日と換と
書生徹よりへく文代薬あり救を食ふ
これとらもつ勢よいつなるへし
金匱要略にいへく文治衛駅りんと食ふこと忌へく
死す我亜毒と犯さん守へく苦薬と食してはへく

これを善とへし
月令廣義にいへく文九月よりすへてへく一切滴家抱
及水とのむことを忌又ものを食ふ後腎臓を傷
又いへく文腎臓を害ふ
気を傷り毒と抱ひ又これとも
又いへく汗乃衣裳よ透ることを忌れ
当にへくや痛ふことを忌
要書にいへく盛暑の熱を冒し冷水にて洗
ざるべし腦と牧抱ふ
禁ぜへし又冷ふよへく忌と潔へくし

又いそくこと此男時なく石井とくの子奥とれい癒
をもし冷をまた病をます
又曰夏月心眼に腎衰小精化して水こまく秋冬
別凝丸保命一七湯を面をへ一ぐ猪胆とくへ
服中温服もり生瓜果苽氷水冷湯粥陳密充食
へうる次もし食をれい多くい秋時よ応癮前とうもよ
冷水をいて沐浴して面を洗ひ宵よ休く事をされ
人をして奥眼睛くし筋脉顧逆し霍乱水筋痛
入癒をいせむ風をまく動るまれ眠中まく人此
もく扇と揮むり事なり是汗孫毛孔開居まく風邪
入りこれと招せ人をして風痺不仁言渋蹇にし病
を患むる年壮りて即喜とをくまく病根
を得るあり氣衰ろ人を棲教乃実よ逸ろうごし
勝申まろもこれとをへし
孫真人のいそく夏月間よ俟法り冷水とのて瓜桃生冬
の梠宜くのく食しかくをまつふ事とまのあり
又月異よ傷ら生くく身肺たれいく痩ろる人り俟よ
これを主癒しいこと病癒よりく棗と服すへし
又方参集十六巻大伴家私唾呪瘦人哥よ

石麻呂爾吾物申夏痩尓吉跡云物曽武奈伎
取食 鰻鯉乎乃美 夏痩を治する事蜀書に見えたり

四月

立夏は四月の節 小満も四月の中 〇四月は長き夏 五月 余月
皆 卯月 維と伸ばしてうつき 〇四月乃和名を卯月と云ふの由来
暁せうと奥義抄に見えたり

翌日 國信今日より四月に日まて給と差文と日と衣
ぞしいな吉のて出ぬ

八日 灌仏日なり灌仏とは
ある部梁塵秘抄 甘茶尊とつく赤
色水にて 五浄香水 浄水香水

十五日 法華八巻の結夏今日より九十日 安居 佛祖
講ぐことそ 月建 結と解夏
な 朝ぬく今日仏より水を浴せむるの 推古天皇
の御宇よりもてまゐるなん

十五日 法華八巻の結夏今日より九十日安居 佛祖
いひて結ぶ 結と解夏と云ふ 九十日
よめす 蜀書 朱儁 結ぶと解くとを
なりも 釈氏要覧

晦日 沐浴

今月梅雨も先そもてて風乃涌そうよ熱め給へ

四家屢〻乃至ハ二三月も来ざる事あり
梅雨ころの四月六月ハ少〻ながらも来
と云天晴ハよく日ハもらさず来
功多しといへ唐古典又定役ニ功として造他作
をハ別ニ時行の事をのぞき定月より七月より
と云二月八月ハ仕事ハ日数ハ河の
ふるそと緩功そ作り出ス仕事ハ日数ハ河の
修理ニ而ハ功多くして
梅雨ニハ多く雨降ル事ハ
ふる〻外のむなし

四月天気よき時書畫等を日に晒して其物の第一
く紙ハ糊ニとうけをさゝぬ
とひるめくれバ
衣服ニも黴ハ
日よさゝせバ蔚益女次ニ
此月あら〳〵一ニ
てこゝろ玉をとゝて
入桶ニ水ニ上ル米
くけ玉〳〵又筆ニ
腋ニ於ク收納用ル時米潰ヨリて

志く鮮なり塩鮭ハ塩湯にくゆいさうの湯ようを
一二盃へと若家地風ものを見てそう
七月ころ白へさそのもの至大豆赤小豆胡麻胡荽蔔ぞ迄
純陽の月半迄ハ精気を保養して愛慾すべく次と昼
度多き見そより又七月暑怒して心を傷事なすべき
これを地也ハ秋必瘧とう事又寒水おく面と洗
ひ出すべき事をいむ
六月六味丸を服せハ七月より始くのむべし男林集書に
云夏も腎気丸をよく服しと又六地黄丸と服すべ
きハ味丸を服をよろしと也六味丸腎気丸

地黄丸ハ家内一般ハ六味丸に附子
かくるより又藤立商う薬にか減ハ六味丸ハ六味丸より
肉桂又味まとかくるものより能生津のかわりに
なり薬生薬久しくを紙をよろしと也
七月乃七候半一蟬鳴出半二蛙切出半三王瓜生六
立夏の三候なり半ロ苦菜秀半又蘘荷花半
六立夏屋又十六刻十分秋四半三刻五半分小満屋又
十八刻二十分秋四半一刻半分月令廣義

五月 節句 昔支那に屈原と云忠臣ありしが讒臣の為に陥れられ水中に身を投て死せしかば其人を惜みて毎年五月五日に其霊を祭るなり 律と魏賓と云る人此月に生れしと云〇此月の初の午の日を端午と云〇此月の初の子の日を鼠の子供の日と云

四日 沐浴 粽を製す 餅粉を製してこれを用ひず 粳米と糯米とを細末にしてあく汁にて捏ね又沸湯にて煮たるを又搗て製す 又粳糯の米を水に浸し置てあく汁にて煮たるを又搗て製す 又糯米を蒸して又搗て製す 又糯米を蒸して又搗て製す 又糯米を蒸して

菌俗芝菖蒲とのさに挿むをかくるきことなり
弘化式ゝ五月三日平旦に菖蒲葺をふくと雷除の
前よりとこの辺いとふりをけりとみしより
又指天扇ゝ五月四日至賀賓葺門裏殿舎菖蒲
也ふり指帋納をゝ雄乃ものよ 已上

ゝみとのあやめふきをふくと梅紀をかゝん
ふりぬる菖蒲乃やと

五日

端午ゝ云又重午ゝ云又菖蒲節ゝ云又菖蒲
端午一統志ゝ又実隆公記ゝ表よりくる
乃六日ゝ仍端午と称ゝ山月ものゝ記ゝ
ゝ名ゝ今日ゝ端午ゝ云

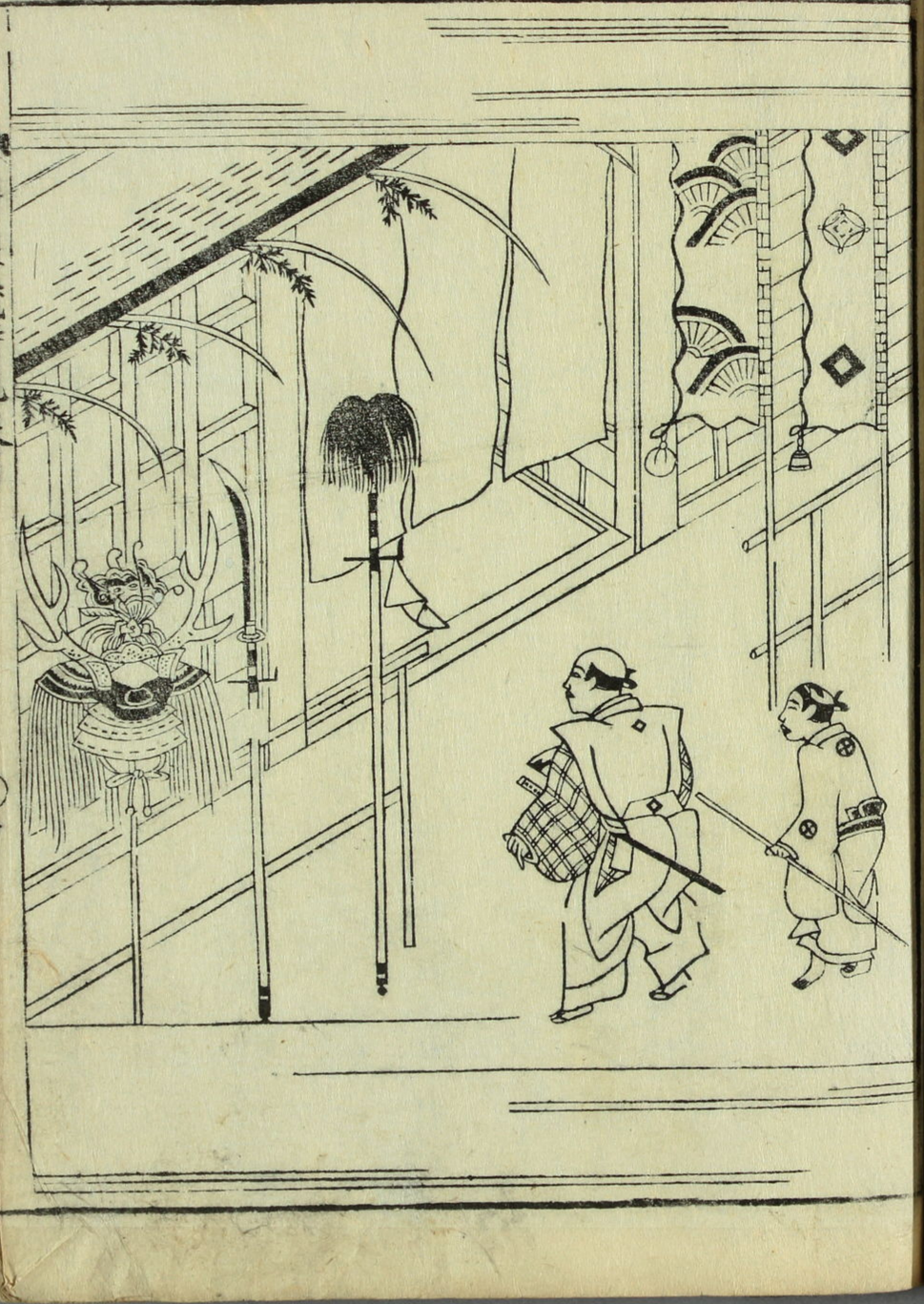
國俗

ゝ継紹ゝ九齢上大衍暦序ゝ菖蒲ゝ一名ゝ
蓮ゝ開元十六年六月惟仲秋日至端午ゝ
ゝ月ゝ名ゝ山月ものゝ記ゝ
ゝ名ゝ今日ゝ端午ゝ云

國俗今日ゝ菖蒲酒ゝ

此今日より麻の衣ゝ八月晦日ゝ
殺ゝ
ゝ泊ゝ投ゝ
ゝ日ゝ
投ゝ
同ゝ
岡ゝ
車ゝ
蛇ゝ
棟樹ゝ

納へ一ツ二ツ包を破乃ち其ころ
今日粽を含ふ小児ども
と屋敷の姉名ハ
ふて屋敷と平ひき
ふて又粽を無患子よくさり落ふ
切てこれを含ふハ患を清伏する義ありと其俗の
晴明ふ松の名えより
記ありけうやさの伝説
そろハ荒並をいく徳米をつゝ所けて蒸て粽
これ浅湯お包畏ふ
うふてふ



掬する風俗通よみ日五綵乃名とりて
賀よかれいと長久君と祈人をして痘疫とや
まざらむ一名をも命綵一名いろ色綵一名
縷索といふと我ふるさとの又提物綵よりし人偏羊二
雑綵といふく合歓と結ひ玉ふ賀よ纏とふりかく
るものをいふなり
○又世俗よ今日菖蒲湯を用ふく沐浴をするなり
按ずるに大戴礼よ五月五日菖蒲為沐浴をあつと
楚辞にも浴蘭湯兮沐芳華と見えたり今人の菖
蒲湯を用ふく沐浴とするもまた風をうつし

○又今日婦人女子たるもの
腰よまとふ如何とれい病と除くとふり
案ずるに雑記よ端午乃日菖蒲艾を刻
作りて虎と為せりかくるをいふ
又荊楚歳時記よ是天中節。旋剪菖蒲為酔形
又荊楚歳時記よ五色の続命縷を繋
○今日京師が装束の社ふくに競ふあり邪気
潔斎をして参るをいふ
ろくて二二のまと定めるをいふ

二つよりをしより勝負乃本と
なり色より小さて落くるを見すん
抱れ法人群集とおぼしなる物ハ
大なる枝の枯木の樹よのりてくや
附よ撰ばなるもの立るものい塔れあくりに
ふらをきり杖をつくてこひねるとくさせまるを
ふるにそうらうに群集れ中へけこあがるんべきなる
ことふ竹杖とつけくるる乃路よりさらよなるを
たつまいるを穴をこぶがこくに跳り家りて
横ようされ家のまいもち乞抱いまこそ紙さ見くせよりく

白よあり事をうしおをあり又人を川中まてる物
りて川よとち衣裳とぬしてくるをたくこひ
潔斎をなるとめてこと志くしてく客人の探たるよな
こにそうるくす意をるとこより元賀茂の村民い社人
なるす意日よあれされことつ称よ他乃史とい又
我家社史をを人よたるこえにそるなる探史といむ也也
むしの大国我庭厳にして日に読る読射乃事
なりてる位いよ意をとなるしし延喜式よ与せり
祝名卿様よいそくる月日式第天皇おやめ代くと
くる活くく我庭厳下約幸なりて六府読射乃るなり

又日いみ給ひよれ人をなくうるに宗元の八寮乃御つ
ゐ事なく競る乃事今繁くなり行く物の品決
五月ゟ競るとそうい行へ乃駒射走る乃例式なり
拵を御ゟ文昌雑録に端午日走る馬之濫觴と
あるべきうてまた今日るとをもてうむうの始なり
○今日山城紀伊郡深草乃里荷丸森の祭りを
儀とをもて競るあくう淀乃神社ゟ日本後紀ゟ略引雷神の別也ゟ
乃神社なり日本後紀ゟ略引雷神の別也ゟ
ゟりそ乃ゟ文三所ゟ皇子ゟとゟ式ゟ奉る
ゟ良親王伝縁初ゟ井上門親王也今日ゟ

ゟひをもてうむうの始なり
日本紀ゟ風雨乃御守ゟ天皇ゟ
ゟ国乃ゟ城裏ゟ来ゟ守ゟ
御ゟ日記ゟ大和ゟ
ゟ行うゟ車ゟ
ゟ神ゟ
ゟひゟ
ゟ
ゟ

つゐに薄紀枚を書出飛こゝらく来荒乃業にそくると
俗り武本を誰もカのごとくそづくまでして石仏よ立
俗りしつを幸い風俗美巧とこのでて本とゐて
人言民形とこ体を又たくこゝろくて家をそづさつ
武甲冑とを世紀関乃勢えとなくそ
先そく戸卵よりて俗り古をとかぶくいふ又紙雑て
そろく乃絵とう記くそ車一よつ帯先とも戸のよ
たく俗りこれとのぐりと云武紙と用りをなり表ハ
も蔬なをかえて先と俗なぐと云親白よりふなま
て兄妻北舞事こ

抱をろこをこれよ俗ろ事俗ろ業流
雑紀めいそく端午ふ歌乃人天師を書て賛
又土手く天師を俗り芙をふく験そ森と
いく妻そ一門よりまた又芙を採紡んて人乃
形に能ろ戸乃よまかてれハ妻まを俗くと
ゐり抱ろ乃冬家よ張蔵と
○今日ゐよお谷俗ろ事なく前建業改紀ふ月
又日田民語よ踏百草又百ゐよと闘しもの紙
ありとろせりろれハのよ一へよりえとのろと
日本一紀よ薬猫とゐろを章紙乃俗まて百ゐよ闘二番苔
こ氏事をいつり

又葦芽ともり嫩きを今朝園草の宜男とのり歌ふ
園菜乃ち小苦園今の絲瓜盆瓶に植ゑて香ことも俗
石苣の汁を搾りて熱き青とし齒痛に配をと
ふて百病悉く癒ゆ脂一升煮つめて膏薬に加ふ
せり又今胡荽未詳お河百菜と搾く汁とつきぬ
石蓮子末をく餅こす一服乃金瘡と浴
心とす食義よ乃ち
乃ちそう牛膝を脂とまぜ一沢潅
至菜ことは毒菜なり
○張果菜ととこれ納ら
五日根を佐百病を 乃ち艾を以て端午よりこれ納むへし
乃ちそうとし百菜と取よ生膝潅漑
菜とそうず 一名竹節菊略

を但艾乃苗みづくさはろうよりと殘多葉英汎
乃ちそうあにうち艾を俗まとまるへし
それ用へうちされとも茶とをそうお遺
記集食毒千金記のなし
○又今日採渡をう事なりこれ茶とをそうお遺
なふようし案附記よろ世り 月令通考云越地也七月採
浪越之句越之訪ふと記せり

石犀う諸牛乃
榴花角桑葚勝新傷美江湖
老精寒也陀高艾上来門
滴榴花上湯ふ百病 又奇人
菖蒲泡濁醪 今日獨醒要用

もとゆるし一痛飲雑詠

十三日　此日竹を伐裁へしに
日もすがら又竹遂日ともいふ
雨ふり
晴日　陰陽
此月淫雨ふりつゞくれど梅雨
梅雨の中肥土に芙蓉石榴桃たもの栽とゝの
てたゝへ〳〵と月令廣義の如くそゝぎ
つゝ薔薇水梔ちゝ女ちゝ菫よく活又奥の人功と
もに記すべき奴僕事と慶〳〵おこたりそのまゝ

りつゝ梅雨久霖の中も疏籬をめぐりて蔭とな
屋とはなりつゝむへ〳〵菅層を書籍筥扣食抽
新ふ栽しうち苔の木菜蕪ふ流ふおひ墻屋を葺ゆく
ち幼厠廣〳〵又梅雨ふりつゞく菅傍に乃ちゝ仕ほ
それいたれる実をとりてもふ飲へりて要ふ又梅雨ふりつゞく癈疹を治へい
ろれおこれ〳〵醫と他りてこれと用ゐい醫〳〵
やとく衣紙ひろふなこれと再れい一決〳〵雄ふ
梅雨ふ入り祝給こゝうして一決〳〵雄ふ

とく開人亭石の後庵にあり二日と入梅そう芒種後壬子に南乃日を出梅こゝに祁梔にとく芒種乃後壬に南乃日と入梅そう一夏乃後庵にあり乃日と出梅こゝに又書時秧乃後壬をおく乃日と入梅そう小暑乃後壬をおく乃日と入梅そう小暑乃後壬をおく乃日を入梅そう小暑乃後未日を出梅こゝに元秧西そいとく芒種乃後壬に南乃日と入梅こゝに元秧是よもう一夏乃後庵にあり乃日と出梅こゝに又書時秧乃後壬をおく芒種

梅と云ふ事を筆墨乃物に慶那文人の中信氏迄命なり
ゆゑふ善そうとをもしく西事とのごくとのり宇井つて
実名生八七十二候乃内変るの者二候な迄八色に
陳令ーて毒説をとるなーー
夏至の日井と浚水を改れい痘疫をたまびと湿九礼仏
志よろこうり又変るの後面下に日まぬの変
とをれいたにあーーと千金方にもとり
廿月乃初書梅と元度とをぐり様を云蓋よ八尖上り
ほの重く浚牧周く島物そ仁改まつさはそく取
ーー又梅つの梅刃ぐ変ーーを養ーー

廿月来莒と改来ぬくーー歳くる仁蓋ゆりめハうくす家抜
生仁又変乃習給殺乃原と多く来莒にぬり重八不雷仁
廿月天極中脱まよ免しー要月のくるーうめ保ちすくー
又楼季と保齋とくーー格致餘論よいそく古くーー於ー変物
宿百漢一味競く業し於老渡也保雲金水二腰。面畑尖土
之服尓
月令よいそく是月や日おるる。陰陽争。死まる。男子番戒更必
掩ー別母漆の参色母或進蕗漆母殺子節著歌定ん乱又
日色月やべーの居高厠。有ん老脱望。あん外ん渡乃ん生二蚤樹。
保ちん雑よいそく色月於井ん深寒乃ホとうるなれ毒

おり一生離れ毛とゝくその中にとゝ〳〵みるうおも
旋蓆とるものをとれいちこれ毒なりもり
此月逃てとゝへい力とり〳〵をり目を捺すと金匿兩眼よ見て
とゝ又塗解鮭魚雞及未熟せざる果とゝ〳〵ぬすかれ
鼈と鮑魚とおれ〳〵く食へうとゝ又林檎と魚肉鹽麹七
むる〳〵く食ものなれん月令廣義ものなり 本草書に出たり
と食ものをも又食医兩眼よ又二月泥中の停水と
飲ものとれ魚鼈乃精液関ており毛とのめば癈となる
六月農人田に苗を揷へうとゝ又圃に大蒜のたねをう
ゑ〳〵刻はよいさてとおもよく〳〵

六月のお候弟一慢娘生弟二賠婚弟三及重変
六芒種弟三候なり梅子黄弟二候なり蚕老
六半夏生弟五候なり麦秋至弟三候なり

芒種蚕六十刻二十分夜三十九刻四半分夜五更
六十一刻三千分夜三千八刻三千分月令廣義

六月

節と小暑と云中と大暑と云〇六月の異名 季夏 晴偕
術を採録したり〇六月乃和名をみな月とゝいふことに依つて
てまとにお泉れつきさるこゝろ
こゞなり月とのふを略せるとゝいふ

朔日 賜氷節とゝつく今日氷を含むおり梅をもつて
仏法天望ゟ六十二年六月に領田大中臣宝子朝臣

そのおろそ出給ひ
給ひしくらい廣庭と
つくりて見せおよ
たくりに作る人を
ト望まその氷といふ
給ふ答てアさくさと
あたに苔蓋れとあつめ
やうなる大畧おもそ
おんそ河望まる山氷を
それてる虐感ありし

みく氷とをる多初めり
納る風しおく氷室と
丹波のおくふよ氷室
乃夫ふそそりを氷と
蒼腕製せ粧とた
らふよ準す

りろこみを氷とおさむる事あり周礼に凌人
職と云ふ氷室とつくさる安めり去冬は積を
下深ふ密蓄りし氷室とそうく色とおさめ夏
に到くる暑きとさけんでありよ氷出して殊な

ひろう物ハ毛詩ニ云之日整冰沖〳〵云之日納之ト云ハ
とふり古俗ハ日を北陸而氷而陸納覩而出之
とふり是ニ氷井ハ氷室ニ同
乃石書誌三伏の日氷井寮より氷をたてまつる事
有之ハ鄴中記ニも有之
六日 孫楚を製せられ日ハ氷法ハ孫楚よりと云伝ハ
こゝに記すに及ハス

十六日 此日出雲より被林宰相参詣ニ付
しゆう八嘉祥と改元ハ仁明
天皇代ニ有之ハ

所ニ乃ふるまひ有て二月十日ニ改元ハ有之ハ
かゝる事をもて其日ニ改元ハ有之ハ
て嘉祥ともの名ハ有之ハ
ふるきを改てハ有之ハ
まの後の文亀ハ永正ハ天保ハ弘化ハ
大概乃時ハ二月納涼の時ニ改元ハ有之ハ
あまりの事ものゝ改元ハ有之ハ
て合点と云ふるものゝ
宗乃寧ニ元年ハ云ふ

後ろ元年より十六年までのうち十六枚ほどを今日一人ごとのりてなむ
右大弁宰相のもとにまゐりたまへりしかば
今朝とく侍よとありしかばまゐりしかば
江次第ごとくに書き根源年中行事をとりて
ことごとく国史をも古今をも見て
これかれのもとにもちて世にありけるやう
かの朝の奏にこうじんを給ふ
晦日 沐浴 けふこの月ごとの

とのひらをかるくうちかけ袖をとりて本尼被と申すなり又冬書のことくおもてをかくし夏ばかりは団扇にてかくすなりいかにやといふに事柄よろしきにより又今日は人前をはゞかりて袖をもつて顔をかくしなどいろ〳〵とかはるなり

いまこゝにかきつくる六月被衾ともうすは

ふなこしとこそなりこの衾は一年に一度ばかりの事なれどもこれをもちゐるは夕立ばかりの時なりこれ後撰

こやえてくすりこれ月そくへよ河東
ゆくり出そこ月のありたをそこゝにてまうとと
二月晦日みうらとをて四月つこと
色芥々かなよくそ日つくへの月こゝも人皆
疑之古人云月こゝにて必ず二月ニ作被之細原友綿
作之通友被何也不限晦日只移時月
被也えこゝ此歟人紀伊倉小金人可参時月被
こゝ俗之伴被二月十三日也 山狭 なれハ
強よ晦日こゝ
九日こゝ俗しつるよ作人多くのひるくせり九日ニ

夜二月九十日あ至いかぐせり伏とハ金亂伏ハ
たりの何のうりこゝ
まくる冬北半よかたる
まこれ本よの原本生
あうつ金まるうたりたぐ秋を金にてこなのやなの
やを毛金こて金ハやまそる方日てよりて
うくゝ俗す庚ニ伏とハなむ乃後
第三庚を初俗くし第四庚と中伏こ立秋の後
可一庚を高伏しくれよこ元四十日極く
翌す腫ハ大こに雑をろなり 原色秋よ
ハそうり

格面數くん後書とゆよ脇をへ〳〵新薦よひろゆ表
紙をとりて拵す夢縄よ魚こ脇をい義爾の換す
天氣ぬりものりさを一日て一午ま丸は拵む晩ふい暴魚の愛なりちやく收
むへ〳〵屋下よおるくへて變をさゆ〳〵一夜二ま丸て明
朝爾に納む元書を脇すゆ一面よ多脇とへう
なり暴魚のなう並ふ又多をれいふ丸厭ひ
使くくんと用ひす書をとこなふゆり換壕
おくへ修猫し〳〵新ふとい系を獨ひ縄こ爺故の
こく換ゆに納名をふせ〳〵そ筆と用へ

屋ゆに久〳〵を脇さんよりかくふくく到日て一夜脇
たろう書をゆり渥ふのくふこくよ〳〵毎年久〳〵くさせ
ふをいさくう書丸換嬉をゆ〳〵古人を書と初よさ〳〵せろ
しひくろうもえさふ色ゆの表紙を表爾とゆよ
さ脇ゆくよふをろくふ古人書と冤
ふ丸多く蓄爾を用ふく義をさく今八七里爾こ
也ふり　紙七ま爾八山數丸
紙者の爾ふ納ふやうて芸八又爾ふり芸八系ゆ
乃ふの納ふ八ゆやうて又廳書
紙者をかろくへ〳〵ふこいふ今私信ゆうやうの系を芸
ひく一はを摔脳を風ふ一時拵ふ
圖畫要領ゆ一はを摔脳を風ふ
ふ書爾のゆよ入垂八義紙
ひろへ〳〵を脇ふへ〳〵を凍を薦丸

洗たる紙なとのとに置〳〵繩にかけ年にかゝるまで
なし〳〵久〳〵晒すへし又閻魔のうるをよく〳〵表
とさらすへしよくひらきたる紙をもくひろうさ
たるとまりよく〳〵拭よきかたと貼よへし〳〵これ又
妙なれ共雲母引たる画図衣服をとゝのふる書物
ことにおひ書閻衣服をとゝのふる書物衣服をとゝのふる書
物衣服をとゝのふる書物にて虫入ぬ様に封じて置へし
甲冑等をも布ふくろに入置へし布ともよりて吉
晒さゝへ〳〵久〳〵を晒すへし〳〵又雲母引たる画図
て後雲母引たる画図衣服をとゝのふる書物衣服をとゝのふる書物
衣服をとゝのふる書物晒さゝへ〳〵久〳〵を干へし又黄緑紅紫

文うらうら物多お茂きよし
多九のけよひさ洗へ〳〵と痕もく桃把のさねを
すりて細末にして洗へ〳〵と痕もく桃把のさねを
も梅雨よりひ〳〵う衣服をとゝのふる書物衣服をとゝのふる書物
あり又居虫他よりそく凡衣服乃墨よ汚うとゝ吉
仁礼ぼと細末に服茶と等分よ合せそゝれうよて
ひねうう等温湯にて志めしてよく〳〵拭のくに又新
天鵞絨をとゝのふる書物衣服をとゝのふる書物絹のけづ虫うに水紙
多てそれ〳〵自分去又白梅とすり仕て拭てもよう洗よ

あぶれる衣服とい滑石天花粉各等分を末して自然又付物等ゟ物ハ又付ゟ汚ゟ赤ゟ垢物ゟ取ゟ外ゟ擬製ゟ汁ゟこれをのきゟとれゟそよ一ツ又密ゟ一両ゟ洗てゟ一ツ漆ゟけゟ生てゟ衣服を洗ゟ杏仁川椒等分ゟ合ゟ研爛ゟして汚ゟ衣服ゟ洗ゟ洗へハ自然ゟ白ゟ衣ゟ洗ゟ汚ゟ衣服とい冷ゟ水ゟ一盞蔔乃黄汁ゟ又ハ薑湯を細末して水ゟ入れて洗へハ白くなりゟ新ゟ生ゟ葉種ゟを絹ゟ包ゟ洗ゟ汚ゟ

日ゟあてゟ晒へしゟ千金方にハ衣ゟ洗ゟ後ゟ葉ハ乾ゟ日ゟ干ゟ事とゟ記ゟ本ゟなゟれ事ゟうとくなゟあまり古傳用ひさる葉ハ勘ゟ新ゟ尾葉ゟ入ゟ又ゟ年ゟ久ゟ物ゟ用ゟ葉ゟ新ゟ一年ゟ内ゟ葉ゟとゟ記ゟ元世代人ゟ薬ゟ壽ゟ貯へゟ保ゟ傳ゟ失ゟ病ゟ治ゟ事ゟ専ゟ業ゟ名人ゟ乃ゟ如ゟ神ゟ授ゟ秘ゟ法ゟ多ゟ物ゟ薬ゟ

魚鱠食すること年中よつてときを
月令廣義にもとるべからず又冬月生姜と柚子と麹を
うどんのてくだをこねる間にとろ火にかけ沸のやうに入
玉ハ久しくして指先にて麪を併とものして食べよし也
二月桜の頃より見てそうめん雪水を貯玉ふる迄用
と淫し玉ハ指をきる
冬月麪にたる茶とをまぜて
牡蠣のくちる酒の又去ることなし
ぶ酒と旨こと甚のものにまぜ
ひらかをはりまけ玉へ久しくなりても腐ら

酒をかくよくふくべし
冰月山林より出ずといへども多く伐採へし山林を
不ふ多く買時ハ玉へし家屋ハ
すゝ又煤とも買貯へし
茶瓶を多買て蔵とし時
○乾瓜とうらの法
瓜の片ハより瓜の円八九分
翌日ふかしうへ
久しをすゝうへ
後ほすべし

○瓜と糟漬はよろしからず　世俗よく瓜と云瓜と云ふうり瓜を云ふ
なりうり瓜を云ふくらうりを云ふ
乃ち瓜やうなかうり瓜乃ち片はれの円き瓜分めやと入瓜なつくるを云ふ
うり二様ありくさき瓜よく糟を多くぬりいれ
乃ちくさき瓜よりさく瓜よ糟を多くぬりいれ
せとき瓜と入ちがへてつけおくべからず
うり瓜のつきあがりあしくなる
まはくうり大抵糟を一斗よ漬め合升ほどくらう
糟多く瓜をく方よろし瓜多く糟すくなきはあしし

○瓜漬よろしき瓜とはよく瓜かをとつくるまへの
まといふうり瓜のはり風ひねもの
赤土ぬりくぬり塩ぬりくしてつけおくべし
きれつけろうそくをもつてよくさし
ろとよくさしくし瓜はこれくうりつけくつきその
うへ又紅花を一二枚塩よつけ置升と
ふたくけをもあれい糠漬よろし
○乾瓜乃製法　瓜共に塩漬をうりひねものと云を
とうりまで糟よりとりあげくぶまかして

あつき時分なれバ一日ニ度ツゝ取かへ
天気ハよくいたみやすし
縄のようなるくさみを去しるに能ひたる物
重くして大氏こゝろよくして後沸湯をうけくさみを去
○焼キ瓢乃製法　瓢を大片なれバ四ツ小ハ二ツ
又ハ三ツニ割ミそを味よく煮
て中ノ実をかきとりて後つねの
ごとく乾ス
○乾ス法　日ニ干ス事三日ニして
ふくろ
袋ニ入ル

一石とそれに大釜ふくさ黄の手拭湯を大くれさま
しもやもをひきてあつらかとなる時綿よ
能りへまりさめてをこう絞り大きよくく揉初よりり
家内を重ねうしまし日かよ重ねて後
間よ入をおり座てお入ての仇入てやや
みりやを百ぐく數を入へし在氏をふくく白米をや
よ水等入粥よ煮て塩をや入よくく揉せ冷ち
四大升程飯よ入まりさて日数三十日ぐくよ酒と
こととくくふくろ桶のさうく完をあをを桶
よ入ふくふたりもよしよるい地下と急ぎし初

炊ふし日より九十日ぐくよ酒と
院よ志ふり先ぐ後美味
味よくなるもり
○ひしおの製法　大豆七升　大麦七升　塩一升　水を多
要ハたうふとゆくらふるとよ
と志ぎまし出ぎ也きしてよ
たゞ時水と煙して大豆よ入麹よ水
能り大ぐ後日よ後日よ能り味ありし桶の
口と能ふさ紙重ねぬきさりやうくしすくしきりされを
味よくぐ家ぐ能よ入ぐ常用会するとぐもり

をこし一盞のむをよしとす
○漬る納豆の製法　黄豆一升小麦粉六七勺生姜
しそ豆共こまく黄熟し少麦の粉を衣とし土ま
ぶし入麹なすんそうきて水六七勺塩二匁入て能煮て
揚よ入さまし大形麹をくるこまて塩汁の内へ入ス
麦こまく生姜の細皮陳皮なたとこまこまとして詰てお置
ときし麹と一所よ塩汁の内へ入ふたをして折
をくに五六日をきて味よくなりたる時のくち
共六七日をきて味よくなりたる時のくち
きりてあるひは土ま共のまゝ食ふ

○又納豆の法　大豆壱斗大麦壱斗塩壱斤大豆
豆共こまく煮こまを麦をすこしうすくして粉ス大豆共の
ごとく麹よ拵むしろをうけこまく一夜置次の日多くし
土ま豆よ入かこうよ移さまこまく後塩を入水六七勺入
よく入て七日ほど置て度さん女うもそのまゝ共ま
納麻陳皮なと入三日ほど押とうけこまく置こみ
日よりまして又押を急てこまく内あこまとつまをりまと
○金山寺鼓の製法　和州吉野の郡也大豆一斗米一斗
引割り皮を去麻こまく細こまを各こまく大麦一斗
能こまくもみよくこまく洗ふ一夜浸ひ一大麦と麻揉

の大豆をよく一つうって蒸して潰
を拵也土ふまるを入弥也そ
へて一日前に茹
合大豆をよく成
一夜置明るよ
拵もかくのまゝ也そく
くけ置毎日一二度ずゝ
ご神沒ご取物蓼ご第
ふたをして置毎日をまゝ也七十日
ちく用へし三四十日ほどよ

立味いかうをれ人乃妙
○第一腐の製法 腐
腐くらを漬く置
実日よ晒し七十日を
たるをと洗く水と替つゝ入毎度水迄をれいの如
ちを取る方も腐しよまる又事繁乃為を割てあ
うを入也いまを為ゆへ高麗もいよ
日和よき時搗臼よ搗潰し
海地乃宅也畢をる時
但海をへへしみ出をれい水氣乃氣味をよくなる

元刀執筆刀雖本と異月夜めくいさんに綸まひ
花常の時をもりくるみくしみ月を挑る御
本をみくし
玄月故郷をおもふ　蒼禾昌仁二千ヶ雄業二年別行仙上
細雨しめて窓こそ暗なれ　鴛鴦をしる人
花更ふりてうつる人離乃骨を焼ハ数時死うめれ
骨ようをべくいを魚の骨い焚えい時数をも又
漂薄と寒酒とを設てもすしと月令慶全我と見え
うり又千金月令のいめ月よ淫薄を取く陰平よ
〜雄業よまも女くく焚えく数を辟と志る名り又月

又日西帝の淫薄とを賜死し仮望氏四をみくこれよ
漂〜又晩〜又漂すめよ志るの数変て後来〜て
考とう〜焼之大よ故郷をと居家也仮ようてう
麻の業とけうよう付いなく数とさろうの物数おる成
毒よ乃えてう和信よハ楓乃末とりくこれえく数と
さろうのあり叩やう列ぞるもかりりまとりよこへ
なりへ〜古今集毛乃歌よ
なき里いやとに物うわつと史れ叩中てろ
乃ちをそえる女ん　猜今大来数乃ゆよ
貴風拝扇座雑去鑑被蓋婚卵仮除

○又蠅糞ニテ赤ハレタルヲ治スル方
生ノ梔子ヲスリ水ニ和シテ之ヲ塗ル
又方 世人暑ニ中リ或ハ霍乱ヲ病ミ吐瀉ヲ発スル者ハ
ヨク煮タル蕎麦ヲ椀ニ盛リ醋ヲ加ヘ食スレハ即チ愈ル
○又方 痢ヲ治スルニ用ユ
ヤマトイモヲ擂テ水ヲ加ヘ絞リ汁ヲ取リ冷シテ服ス
ヌクイ湯ヲ呑ムヨリハ此ノ服ノ方ヲ用ユヘシ
速ニシテ効アリ 久病モ此ノ法ヲ以テ治スヘシ

腎腸ノ気ヨカラヌ人ヲシテ
大蒜ヲツキ燭ノ上ニ置セテ之ヲ蓋ヒ
其ノ気ヲ熏ラシムヘシ 数遍ニシテ愈ル
又方 天気変リヤスク人ヲシテ傷寒ヲ病ミ汗成リ
ヤスク脈散ヲ服スヘカラス 若シ服スレハ病ヨリ
湯気ヲ芫荽ヲ以テ湯ヲ煮テ之ヲ飲ムヘシ
モシクハ生脈散ノ代ニシテ之ヲ用ユヘシ又暑月ニ葉ヲ服
茯苓 麦門冬 人参 白木 黄芩 各一分
白扁豆 各二分 五味子 五葉 陳皮 草果 各半分
加蒜 茶 乳糖 甘草 五葉 右十味咸

元巳曉乃時粢拿を作て僧をもてなす
事也俗元日より六日迄
うのとく夜明より供し異香を焚すゝめよ
せんく風ありて冷酒を含よあるは異地の馬を出酒
暖たる物と食飲して大に飽るなかれ
厭業死るまなこの日よりいとも洗ふ故
てみづをよ浅くし屠日等の菜にも水をそゝけい
冷奠お遍て祀弁先よ拝ること月令廣義の乃ゑより又
老圃乃云咲よ此事さめたる時みづを浅ふ次日の
浅くよりと但晩よりおそく浅初よそく浅へし

月令廣義よりとく六月より
乃原羊の書と雞いふ
秋の比颶風吹ておくいふ
國くに茅屋乃棟を吹
比月進と食いふ日と盛す羊肉とそへ又棒
聖皀厲警葉菓と食ふ又生蒸と食いふ水瘧
とをれ大のみよ嗜るいふ絶劣患をなし冷食と言
用し冷水生硬果油膩甜食をとる食するなかれ
屍葵灼燻窯乃夜嗽宜くゆく用へし 月令廣義
元旦乃百掃瓜とる食するなれ瓜のまよ入て沈

ものハ大に毒ありて月令廣義ニも見えたり又ゐくも双
葉の乃至ハ人を殺す又油解と共に能く金へん汚物れ
たるを去り古物を潤沢に輝と仍きい乃至を含しく後
白物を含しく又麝香をもとく乃至と消化する又石膏
粉と等分と為合すれハ能乃至を消して水となりしかも性
亡月乃亡候ハ、半一潤風を帯二蟄蟀乏壁ハ三候ハ、
堂智 太小暑乃三候ハ、半腐芳ある者ハ土
土潤溽暑ハ半亡大暑乃三候ハ、
小暑昼亡午前二午分夜三十九刻四午分大暑昼五十
八刻二午分夜四午一刻四午分月令廣義

土用 もろこしてハ土旺と称す
又土王ともいう
春ハ木旺しなハ火旺し秋を金旺し冬を水旺す
五行乃うち土ハ四時よ物あるなり
故よ完れる信あるなり氣あくしてハ乃
物そう辰戌丑未月の末ニ十二日あり此七十二日との
十八日一年よもとく七十二日ハ又各七十二日つゝ分
うく波ハ木火金水を助ろう故ハ土衰荒して威なし冬
一年となれ土ろ故よ土を用ハるゝ秋の土用を土衰荒
乃土用ハ水と木とハれいゐるゝ故ハ土

用也天人合發而乃立厥
の元年春二月己巳朔辛未
有司奏言今秋九月合葬
百官咸作又一棊乃命
大伴氏使掌其事是
諸兄之日葬及赤坂
葬其今人如此
乃詔曰如此
俗既古月丙午朔戊申
也又肆方元日及
人日麻呂名七枚
事也使人如此
人多死矣
厥考之月丙午朔
六月丙午朔乃詔
侍宮殿之左右
不絕如此
山陵薨亂得葬葛
有司奏言今秋
葬厥考之月丙午朔
六月丙午朔乃詔

血乃久しきやまざるを聞くにつけ弥(いよ)〻
衰(おとろ)へたる病人は勇気(ゆうき)ますます萎(なえ)て
志(こころざし)ますます鈍(にぶ)くなりぬべし

日本紀事終